令和３年度高齢期の幸福度に関する報告書新規調査編　概要版

１．調査の目的と方法

『高齢期の幸福度調査』は平成 28 年度より実施されており、市内高齢者を生物学的な面と心理的な面から調査を行い、亀岡市における有効な地域包括ケアシステムの下、幸せで健康的な高齢期を創設する為のエビデンスデータの蓄積を行うことを大きな目的としている。

今回は、新規に抽出された 70 歳以上の高齢者に対して 3 年間（令和元年度から令和 3 年度）にわたって実施した初回調査（以下、第 2 期調査と呼ぶ）の報告を行う。第 1 期調査と同様に令和元年度から 3 年間にわたる新規調査を実施し、亀岡市高齢者の幸福感、要介護リスク、心理状態（老年的超越）などに関する調査を実施した。

第 2 期調査も第 1 期調査と同様に、亀岡市高齢者の幸福感、要介護リスク、心理状態（老年的超越）、日中の過ごし方や主観的な経済状況などの項目について、訪問調査（令和元年度）および郵送調査（令和 2 年度、3 年度）にて収集した。

２．追跡調査の参加状況

表 1 は、第 2 期の新規調査の年度別に、調査対象者の参加人数、不参加人数を示したものである。参加者は令和元年度から令和 3 年度までの 3 年間で 1,619 人であり、うち要支援高齢者は 17 人、自立高齢者は 1,602 人であった。全体の参加率は 76.3%と大変高く、訪問であった令和元年調査と郵送の令和 2 年、3 年とでは参加率の有意な違いはなかった。

表1　新規調査対象者の参加状況

初回調査年度		新規調査への参加 不参加	参加	合計
R1年	人数	58	204	262
	割合	22.1%	77.9%	100.0%
R2年	人数	216	714	930
	割合	23.2%	76.8%	100.0%
R3年	人数	229	701	930
	割合	24.6%	75.4%	100.0%
合計	度数	503	1619	2122
	割合	23.7%	76.3%	100.0%

表２は、3 年間の追跡調査に参加した 1,619 人の年齢および性別の内訳を示したものである。70 歳群 511 人、80 歳群 632 人、90 歳群 476 人が調査に参加した。男性、女性とも、年齢別の比率は、70 歳約 30%、80 歳約 40%、90 歳約 30%であり、90 歳群の参加者数が大幅に増加した。男女や年齢による参加比率に有意差はなかった。

表２　新規調査参加者の属性

性別		初回調査時の年齢 70歳	80歳	90歳	合計
男性	人数	240	313	226	779
	割合	30.8%	40.2%	29.0%	100.0%
女性	人数	271	319	250	840
	割合	32.3%	38.0%	29.8%	100.0%
合計	度数	511	632	476	1619
	割合	31.6%	39.0%	29.4%	100.0%

３．新規調査における主要変数の平均値とその年齢差、男女差

次に、主要変数について、年齢・性別の 6 群に分け、追跡調査時の平均点を算出した。主観的健康感および要介護リスク（基本チェックリスト 20 項目合計点）については、年齢が高い群の方が有意に高いことが示された。一方、老年的超越は年齢が高い程、有意に得点が高いことが示された。幸福感（WHO5-J）は年齢群による有意な違いはなかった。男女による平均値の違いは見られなかった。

図1 主観的健康感

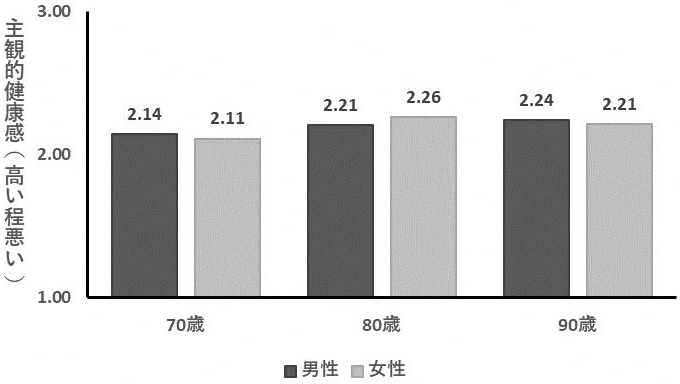


図2 要介護リスク

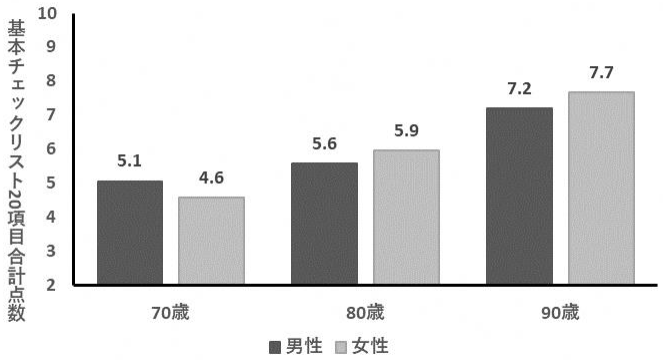


図３ 老年的超越

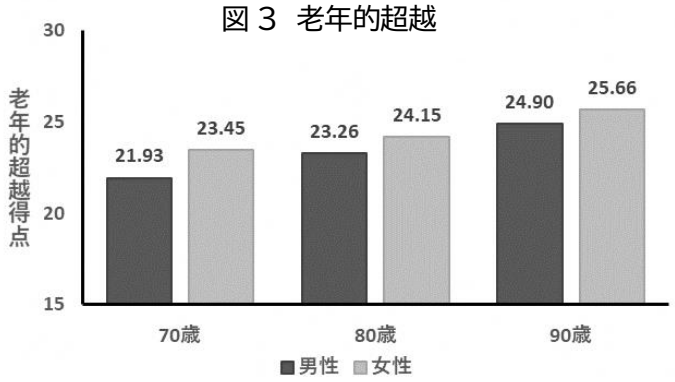


図4 幸福感

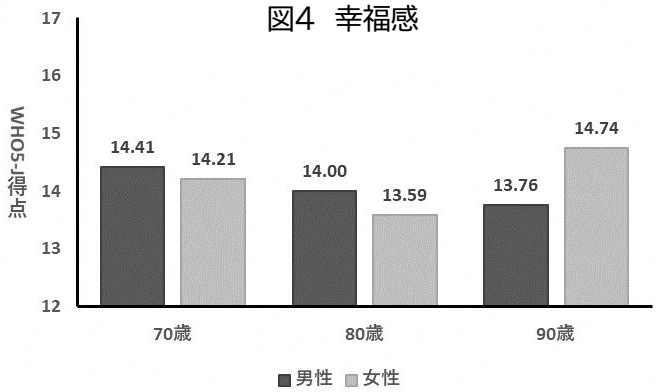


表３は、8 種類の日中の活動について、年齢別に「している」と回答した人の割合を示したものである。年齢による実施率の差があるかを検討したところ「収入のある仕事」、「ボランティア」、「家事」、「孫の世話」の 4 種類の活動で 70 歳群の実施率が高かった。一方、「学習・教養」は 90 歳群の方が有意に高かった。「運動」については、年齢群による実施率に違いは見られなかった。

表3 日中の活動の年齢別の実施率

	70歳(N＝511)		80歳(N＝632)		90歳(N＝476)		合計(N＝1619)		年齢の有意差
	N	%	N	%	N	%	N	%	
収入のある仕事についている	203	39.7%	79	12.5%	44	9.2%	326	20.1%	70歳>80歳、90歳
ボランティアをしている	68	13.3%	67	10.6%	29	6.1%	164	10.1%	70歳>90歳
田畑の仕事をしている	127	24.9%	201	31.8%	158	33.2%	486	30.0%	90歳＞70歳
家事をしている	386	75.5%	430	68.0%	280	58.8%	1096	67.7%	70歳>90歳
家族の介護をしている	46	9.0%	51	8.1%	31	6.5%	128	7.9%	
孫の世話をしている	104	20.4%	42	6.6%	30	6.3%	176	10.9%	70歳>80歳、90歳
運動をしている	320	62.6%	396	62.7%	269	56.5%	985	60.8%	
学習・教養をしている	131	25.6%	157	24.8%	153	32.1%	441	27.2%	90歳>70歳、80歳
その他	9	1.8%	12	1.9%	21	4.4%	42	2.6%	

４．新規調査における幸福感の関連要因の検討

新規調査データを用いて、幸福感（WHO5-J）と関連する要因を検討した。分析方法は重回帰分析を用いた。目的変数に幸福感（WHO5-J)、説明変数として表４に示した変数を一括投入して分析を行った。また、参加者全体、70 歳群、80 歳群、90 歳群に分けた分析も行った。

表4　重回帰分析による、追跡調査時の幸福感に影響する諸変数の影響力

対象者[1)]	全体（N=1201）	70歳群（N=421）	80歳群（N=462）	90歳群（N=318）
変数名	β	β	β	β
性別（男性=1、女性=2）	.021	**-.098** *	-.015	**.153** **
老年的超越	**.317** **	**.290** **	**.307** **	**.316** **
KCL暮らしぶり１[2)]	**-.118** **	**-.180** **	**-.126** **	-.065
KCL運動器[2)]	**-.097** **	**-.129** **	-.051	-.096
KCL栄養[2)]	**-.048** *	**-.075** *	-.016	-.056
KCL口腔2)	**-.148** **	**-.169** **	**-.105** **	**-.149** **
KCL暮らしぶり２[2)]	**-.091** **	**-.092** *	**-.148** **	-.029
経済状況	**.152** **	**.176** **	**.183** **	***.085*** +
日中の活動・有償労働[3)]	.039	.043	.039	-.022
日中の活動・ボランティア[3)]	.032	.009	.046	.033
日中の活動・田畑仕事[3)]	**.045** *	.022	.007	**.133** *
日中の活動・家事[3)]	***-.051*** +	.054	-.050	**-.112** *
日中の活動・介護[3)]	**-.056** *	**-.151** **	.002	.002
日中の活動・孫の世話[3)]	.013	-.019	.036	.029
日中の活動・運動[3)]	**.078** **	.005	**.122** **	**.110** *
日中の活動・学習・教養[3)]	**.112** **	***.071*** +	**.130** **	**.158** **
R^2	**.402** **	**.424** **	**.450** **	**.415** **
調整済みR^2	**.394** **	**.401** **	**.431** **	**.384** **
F値	**49.74**	**18.60**	**22.80**	**13.36**

1:全体および年齢群ごとに重回帰分析を実施

2：KCL⇒基本チェックリスト　3：していない=0、している=1

3:群間の有意差の水準　**：p<.01　*：p<.05　+:p<.1

分析の結果、全般的には幸福感に対して老年的超越と経済状況はプラスの影響を持ち、要介護リスクはマイナスの影響を持つこと、日中の活動については「運動」と「学習・教養」はプラスの影響を持つことが示された。一方で、70 歳群では男性で幸福感が高いのに対して、90 歳群では逆に女性で幸福感が高くなった。要介護リスクについては、年齢が高くなるほど、幸福感には影響せず、身体が弱ってきても幸福感は維持されることがわかった。

日中の活動については、70 歳群では「運動」や「学習・教養」といった活動のプラスの影響が小さいことが示された。反対に 80 歳群、90 歳群では「運動」や「学習・教養」を行うことが幸福感にとって重要であることが示された。また、「田畑の仕事」のプラスの影響は 90 歳群のみに見られた。

５．第 1 期調査と第 2 期調査の比較について

これまで令和元年度から令和 3 年度において実施された『高齢期の幸福度調査　第 2 期調査』の新規調査（自立高齢者参加人数 1,602 人）について報告を行ってきた。次に平成 28 年度から平成 30 年度に同様の方法で実施された『高齢期の幸福度調査　第 1 期調査』（自立高齢者参加人数 1,382 人）と同一の指標を比較し、この 3 年間における同一年齢の自立高齢者に異なる様相がみられるかを検討した。

図5　幸福感

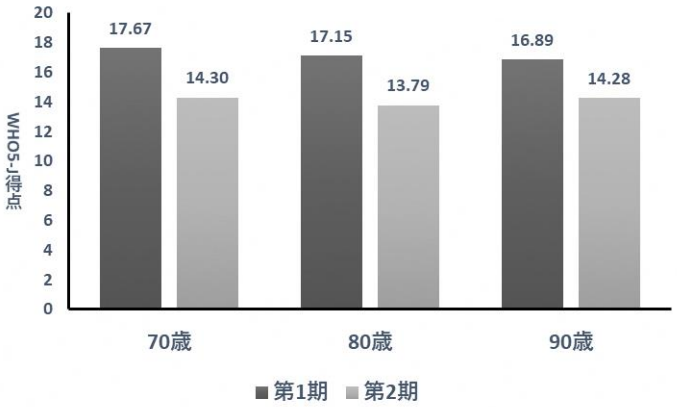


図6　主観的健康感

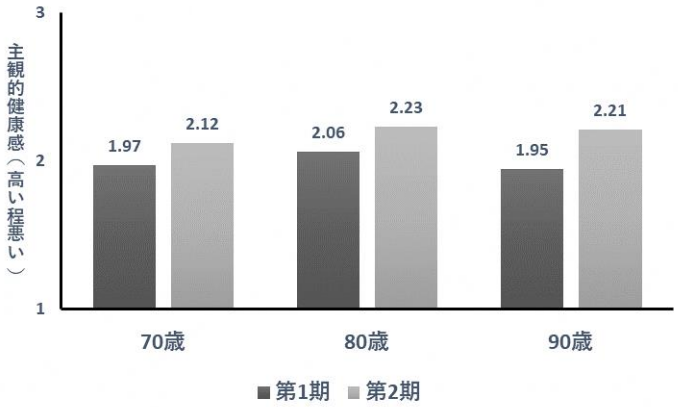


図7　要介護リスク

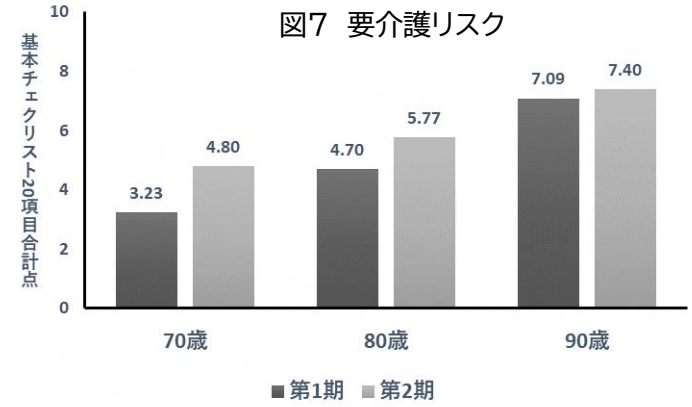
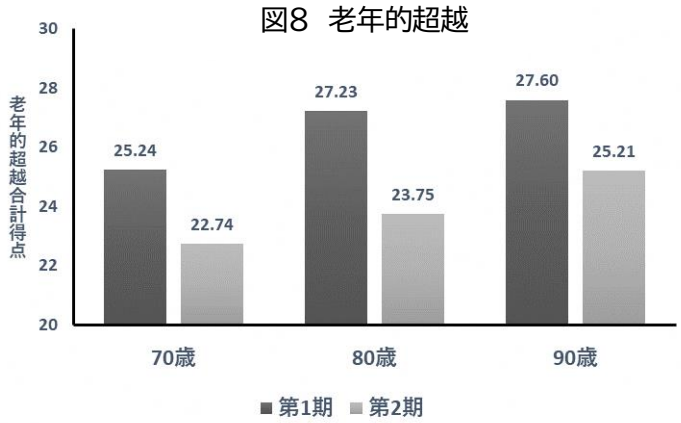


図8　老年的超越



幸福感、主観的健康、要介護リスク、老年的超越という 4 つの主要指標全てにおいて第 1 期調査よりも第 2 期調査の指標の値が悪化していることが示された。また、その傾向はどの年齢群においても確認された。

今回、同時期に行われた平成 28 年度から平成 30 年度の第 1 期調査の追跡調査においても、初回調査よりも主要指標が低下していることが示されているが、追跡調査参加者のみならず、この新規調査での参加者においても、主要指標の低下がみられることは、第 1 期から第 2 期の 3 年間で亀岡市在住の自立高齢者の心身の健康全般にわたる悪化が生じている可能性が考えられた。

また、同時期に同様の手法で行われた他地域での高齢者調査（SONIC 研究）の結果の比較からは、SONIC 研究でも同様の現象が生じていることが伺えた。これらの調査の比較からは、第 1 期調査から第 2 期調査の主要指標の低下は、単に調査方法の違いのみならず、新型コロナウイルス感染症などの流行により、身体的な健康（主観的健康感、要介護リスク）や日中の活動が低下などの幸福感低下の要因の悪化や、その他、新型コロナウイルス感染症の流行やマスメディアの報道などにより、国民全体の不安が高まったか可能性もあると考えられた。